

リズムカルな動きを伴う2歳未満の子ども同士の関わりの様相

別府 祐子

(広島大学大学院教育学研究科博士課程後期)

Peer Interaction Using Rhythmic Movements among Children under the Age of Two Years

Yuko BEPPU

Abstract

This study aims to clarify aspects of interactions by using rhythmic movements among children under two years of age in a nursery school. We employed the concept of communicative musicality advocated by Malloch and Trevarthen (2009) as the theoretical framework for this study. The naturalistic observations were conducted in the nursery school classroom during the free play time allocated to the children. Three scenes in which children interacted with each other by using rhythmic gestures were extracted; these gestures were analyzed by employing episode analysis and movement analysis using ELAN. The results revealed that the children shared the musicality and emotion inherent the rhythmic movements of their partner and attempted to co-create a narrative. In order to establish interaction based on communicative musicality with rhythmic movements, attracting the intended person's attention is a prerequisite; however, the study results show that it may be difficult for children of this age to become aware of this prerequisite, thus hindering establishment of their communication with their peers. The results also suggest that the intervention of a common object or matter enables children to understand the rhythmic movements' inherent meaning.

1 はじめに

「人間のコミュニケーションには、身体から発せられる声や身体の動きのリズムが大きな役割を果たしている」(やまだ 2020, p.302) というが、言葉の発達が未熟な乳児・幼児期初期の子どもにとって、身体の動きによる情動の表現は特に重要であると考えられよう。

小山 (2004) は3歳未満児がコミュニケーションの手段として音楽表現する事例から、子どもの身体の動きとコミュニケーションについて言及している。小山は、音楽表現を、表情・音声、リズムカルな動き等も含めて捉える立場をとり、音楽表現そのものに対する考察ではなく、子どもの内面的な動きについて考察を行い、コミュニケーションの手段としての重要性を示した。その中で、身体を使った音楽表現について、9か月児、及び1歳1か月児の2つの事例から「内面の動きや変化に応じて身体にも抑揚をつけている」(p.28) と示した。そして、この時期の子どもにとって、身体の動きが声と同様に、コミュニケーションのツールの1つとして捉えられるべきであることを主張している。

Malloch & Trevarthen は、人間の多様なコミュニケーションの基盤は、人が生得的に持つミュージカリティにあると捉えている (Malloch & Trevarthen 2009, Malloch 1999, Trevarthen 1999)。Malloch & Trevarthen (2009) によると、ミュージカリティは「文化学習への人間としての希求の表れであり、他者と直感的に動き、記憶し、計画する生得的なスキルの表れ」(邦訳 p.6) と定義され、このミュージカリティの共有により、「情動的な豊かさと構造的な関連性をもって意味ある時間を共有することができる」(邦訳 p.6) とされる。このミュージカリティの概念は、乳児と養育者の音声相互作用の中に出現する旋律的でリズムカ

ルな共創造性を明らかにしようとしたことに始まり、コミュニケーション・ミュージカルリティ理論として整理された。コミュニケーション・ミュージカルリティ理論は、時間の中で行動事象が整然と契機することを意味する「パルス」、声や身振り輪郭から構成され、動きの中で時間の感覚を形成する「クオリティ」、パルスとクオリティが組み合わせることができる表現と意図の「ナラティブ」の3つのパラメータで説明される。

また、ミュージカルリティが通じ合うのは、「内発的動機パルス (Intrinsic Motivate Pulse: IMP)」(Trevarthen 1999)のはたらきによるものであると、彼らは主張している。内発的動機パルスとは、情動を伴う身体の律動的な動きを調整するシステムのことであり、時間を創り出す内発的動機パルスによる共感的な調和と一致によって、人間関係や社会集団の中で協同することができるとされる (Malloch & Trevarthen 2009, p.8)。内発的動機パルスの本質的な特徴は、大人と遊んでいる時や音楽に反応している時の乳児の動き、注意の方向、共感的表現反応に表れる。また、内発的動機パルスのはたらきにより、乳児は、話し声や歌、音楽の音を知覚的に好み、歌や音楽は彼らにリズムを刻ませる (Trevarthen 1999, pp.158-159) のだという。

小山は、子どもの生活に即した文脈で、リズムカルな身体の動きがコミュニケーションに果たす役割について示したが、示された事例は、保育者-子ども間のコミュニケーションでの子どものリズムカルな身体の動きにとどまる。保育所は、「同年代の子どもが集団で共に過ごす生活の場」であり、その中で「子どもは、遊びを通して自分とは異なる思いや感情をもつ他の子どもの存在に気づき、徐々に子ども同士の関わりを持つようになる」(厚生労働省 2018, p.138)。人のコミュニケーションの基盤が生得的なミュージカルリティにあるとするならば、小山が示したようなリズムカルな身体の動きは、保育者・養育者-子ども間のコミュニケーションにのみ用いられるのではなく、子ども-子ども間においても当然現れるものであると考えられる。それは、言葉が未熟な乳児・幼児期初期の子どもにおいては、なお、重要なツールとして用いられると考えられる。

そこで、本研究の目的は、コミュニケーション・ミュージカルリティ理論を背景としながら、子ども同士で生じる関わりの中でも、特に、リズムカルな動きを用いた関わりに焦点を当てて、保育所に属する2歳未満の子ども同士の関わりの様相を明らかにすることとする。すなわち、生得的に持つミュージカルリティをいかに発揮しながら、関わり合うのか、事例から考察を行う。子ども同士の関わりについて、3歳未満児では、養育者や保育者との関わりが重視されてきた経緯もあり、子ども同士の関わりについて着目された研究の蓄積が十分になされているとは言えない。1・2歳児の保育所利用率が年々高まりを見せ、半数以上の子どもが利用している状況¹⁾もふまえると、集団生活の場で、3歳未満の子どもが、子ども同士でどのように関係を構築していくのか明らかにすることで、保育実践における有益な示唆が得られると考える。

2 研究方法

2-1 調査方法

X 保育園の0歳児クラスを対象に、日常の保育を観察する調査を行った。20XX年8月中に、2度、事前の調査として、クラスの様子や子どもの様子等を把握した後、20XX年10月から20XX年+1年3月まで、概ね週1回程度の頻度で、観察調査を実施した。観察は、保育室内で自由遊びの時間に実施した。8時30分頃から開始し、その日の保育の状況に合わせて、1時間から2時間の範囲内で実施した。

0歳児クラスは、低月齢クラスと高月齢クラスに分かれている。午前中は、登園から9時頃まで同じエリアで過ごす。その後、低月齢クラスは隣の別のエリアで過ごす。ここでは、主に高月齢クラスを観察した。観察期間中に入所した子どもが低月齢クラスに3名おり、観察終了日の子どもの人数は、低月齢クラス9名、高月齢クラス10名であった。月齢は、観察開始日に0歳6か月から1歳4か月の範囲、観察終了日には、1歳0か月から1歳11か月の範囲であった。

2台のアクションカメラを保育室内に固定して設置し、映像による記録を行った。観察者は、保育室内に入り、フィールドメモをとったが、子どもたちとの関わりは最小限に留めた。

2-2 分析方法

分析には、アノテーションソフトウェア ELAN²⁾を用いた。2地点から撮影した映像を ELAN 上で同期した上で、分析を行った。リズムカルな身体の動きを伴って、子ども同士が関わっている場面について、子どもそれぞれに「リズムカルな動き」、「動作・動き・移動」、「声」、「視線」の注釈を作成して動きの分

析を行った。また、それをもとに、事例として詳述し、これらを併せて分析を行った。

2-3 倫理的配慮

本研究を実施するにあたっては、園長に、研究計画や倫理的配慮（調査の拒否権、個人情報の保護、結果の公表等）について口頭及び書面にて説明し、署名により同意を得た。保護者には、同様の内容を記した書面を、園長を介して配布した。なお、本研究は広島大学大学院人間社会科学研究科教育学系プログラム倫理審査合同委員会にて承認を得て実施している（承認番号 2021011）。

なお、以下、本論文中に用いている子ども及び保育者の名前は、全て仮名である。

2-4 分析対象

本研究では観察期間中に見られたリズムカルな動きを伴って関わっている場面の内から、3つの事例を抽出して分析対象とした。いずれも2人の子ども間の関わりである。3事例とも2人の内の1人はアキラであること、及び全て20XX年11月に生じたものであるという点が、抽出の理由である。

3 結果

以下に3つの事例の詳細、及びELANの分析結果を示す。なお、事例中の図は、位置関係を示しており、アルファベットは子どもの名前の頭文字を示している（ただしTは保育者を示す）。▲は視線の方向を示しており、事例中の文章の[名前_番号]はELANの分析結果の図と対応している。

3-1 玩具の輪を使ったリズムカルな動き

事例1（11月2日）[アキラ（A）：1歳4か月、ハルト（H）：1歳4か月]

ハルトは、窓際の柵にかかっている、ホースで作られた輪の玩具を手に取り、部屋の隅に座る [Haruto_1-1・1-2]。ほぼ同時に、アキラも窓際の柵に向かい、別の輪を手にする [Akira_1-1]。

ハルトは両手で輪を胸の前に持ち、左右に素早くリズムカルに動かす [Haruto_1-3]。①アキラは立ったまま、ハルトの動きを見ている。

図1ハルトがその動きを止めるとすぐに、アキラは、両手で持った輪を上下左右に素早くリズムカルに動かす [Akira_1-2]。

②そしてすぐに、アキラは振り返り、後方の保育士を見て微笑む。

図2その後、保育者の方を向いたまま、③両手に持った輪を胸の前で、つぶしたり広げたりすることをリズムカルに繰り返す [Akira_1-3]。その間、ハルトは、輪を、左右にリズムカルに動かすことを繰り返す。

アキラは、再びハルトの方を向き、手を止めてハルトの動きを見る [Akira_1-4]。④ハルトが動きを止めると、アキラは、胸の前で輪を両手に持ち、つぶして、広げる動きをリズムカルに、繰り返し行う。

ハルトは、輪を上下に3回、素早く動かした後、⑤輪を頭上に上げ、頭を通して首にかける [Haruto_1-4]。⑥その様子を見るや否や、アキラは保育士の方に顔を向けて微笑む。保育士は、他の子どもを見ているアキラの微笑みには気がついていない様子である。図3アキラはすぐにハルトの方に顔を向きを戻して、ハルトを見ながら、両手で持った輪を頭の上に上げ、ハルトと同じように頭を通して首にかける。

アキラは首にかけた輪から、一度両手を離すが、すぐに、⑦首にか

けた輪を両手でもち、ハルトを見つめて、膝を曲げる [Akira_1-5]。図4ハルトはアキラの視線に気づき、両手で輪を持つ [Haruto_1-5]。アキラは、膝を伸ばすと同時に、輪を持った両手を上に伸ばして、輪を頭から抜く。ハルトも、同じタイミングで、輪を持った両手を上げて、輪を頭から抜く。ハルトは輪を持った両手を素早く下ろし、その動きの延長で、両手で持った輪を勢いよく左右に動かす。

ハルトは、その勢いでバランスを崩して倒れ込み、窓際の柵にぶつかってしまい、泣く [Haruto_1-6]。アキラは、ハルトが左右に勢いよく動かすのを見ながら、手を下ろす。そして、輪を壁にかけようとするが、ハルトが泣く様子を見て動きを止める。ハルトが、泣きながら保育士のところへ行くと、アキラ

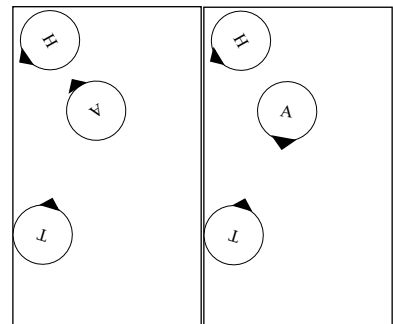


図 1

図 2

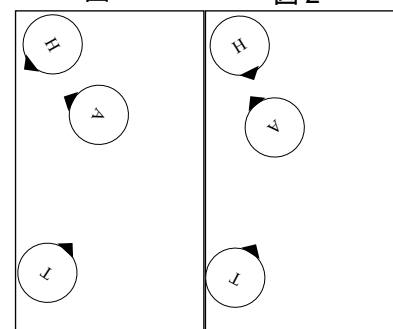


図 3

図 4

は、左手に先程の輪を持ったまま、ハルトが置いていった輪を右手で拾い上げ、輪と輪を打ち鳴らすことを楽しむ。

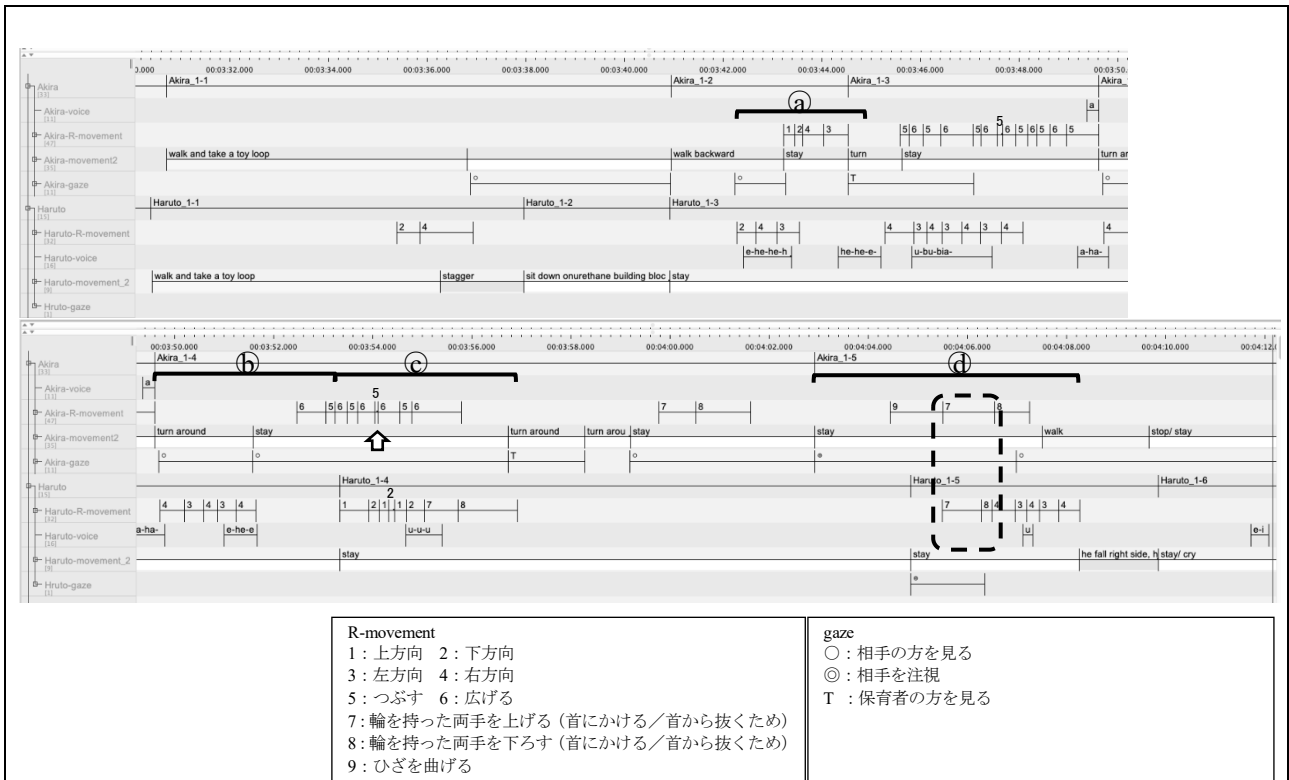


図5 事例1 ELAN分析結果

事例1のリズミカルな関わりは、2人が同じ玩具を持ったことを契機に始まる。ハルトは、輪を手にして座り込み、左右、上下に素早く動かすことに楽しさを感じて、1人でその動きを楽しむ。ハルトが楽しんでいる様子は、ハルトが動きに合わせて出す声や、動きの合間に出す声にも表れている。

一方で、アキラは、ハルトの素早い動きを見て、その動きを模倣することで楽しさを共有しようとする(下線①)。その模倣は、ハルトの動きに重ねるように行われる(図5a)。ハルトの動きを模倣してすぐに保育者の方に笑顔で振り返っていることから、ハルトの動きを模倣することで喜びを得たと見取られる(下線②)。保育者の方に体を向けたまま、アキラは、両手に持った輪をつぶしたり広げたりすることを繰り返すという、新たなリズミカルな動きを生み出す(下線③)。そして、再びハルトの方を向き、ハルトの動きを見て、ハルトが動きを止めると、先ほどのつぶす、広げるというリズミカルな動きを使って、ハルトの動きに応える(図5b)。そして、その動きの途中でハルトが上下左右に動かすことを始めると(図5c)、図中の○で示した部分で、つぶす動きの時間間隔をこれまでより短くすることで、調整して、ハルトの動きに調和させようとしたと思われる。結果として、次のハルトの上方向への動きの開始と、ハルトの広げる動きの開始はほぼ一致している。

ここまで、a・b・cにおいて、リズミカルな動きで関わろうとしたアキラの姿が見られるが、ハルトがアキラのこの関わりに気がつくことはなく、アキラの一方向的な関わりである。

だが、cの終盤に、一連の動きの中でハルトが輪を首にかけるという新しい動きを行ったことで(下線④)、やりとりは展開する。その動きに、新たな楽しさを享受したことは、アキラが直後に保育士の方を見て微笑んだことからわかる(下線⑤)。アキラは、首から輪を抜くことを予期させるように、膝を曲げた体勢で、ハルトがその視線に気がつくまで、ハルトを見つめることで、同じタイミングで輪を首から外そうとハルトを誘う。ハルトはその視線に気がつく、アキラの意図を汲み取ったかのように、タイミングを合わせてほぼ同時に(図5d)両手を上に上げる(下線⑦)。

このdの部分の関わりにおいては、アキラが誘い込み、ハルトが気がつくまで待つという行為を行うこ

とによって、2人の相互作用が成立したと言えるだろう。ハルトも、同じタイミングで首から輪を抜いた直後に、連続して素早い動きを行うことで、同じリズムの中に動きを共有したことで生じた気持ちの高揚を表現したと考えられる。その後、転倒という、思わぬアクシデントにより、この関わりが継続することはなかったが、⑩の部分では、ミュージカリティを互いに発動して、ナラティブを共創造した姿が見て取れる。

3-2 グルグル回る動き

事例2 (11月2日) [アキラ (A) : 1歳4か月, アンナ (An) : 1歳7か月]

アキラとアンナは窓の外にスズメを見つけ、同時に指をさす。指さしの手を下ろした後も2人は窓の外を見上げている。図6保育者が2人の背後に身を乗り出してから、「来た、来た、いるねえ。」と言葉をかけるも、窓の外を見上げたままである。⑧すると、唐突に、アキラは窓の外を見上げたまま、左右にステップをふんで、ダンスするような動きをする [Akira_2-2]。その様子をみた⑨アンナは、アキラの足元に注目する [Anna_2-2]。

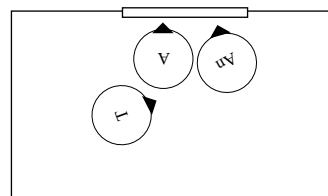


図 6

アキラは左手を挙げて、保育者の方を振り返る [Akira_2-4]。保育者は「チュンチュン、って。チュンチューン、おはよう。」と言葉をかける。アンナは窓の外を見上げていたが、保育者の言葉の途中で、⑩「wa-a」と声を発しながら右手を挙げてジャンプしてその場にしゃがみ込む。図7そして右腕を左右に大きく振り、目の前にあった玩具(ボウル)を転がすような動きをする [Anna_2-3]。アキラは、窓の外を見ながら指さしたままである [Akira_2-5]。

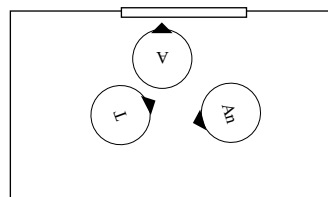


図 7

⑪ハルトがアキラの横にやってくると、アンナは、ハルトとアキラの間に割り入るようにして入り込み、窓の外を見る。図8ハルトはすぐにその場を去り、窓際は再びアンナとアキラの2人だけになる。

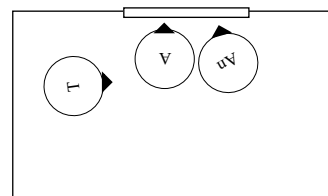


図 8

アキラは、指さしをしたまま、身体をひねるようにして保育室を見回す。そして、視線を窓に戻すと、図9突然、上下に大きく屈伸するような動き2回して、その場でグルグル回る [Akira_2-6]。その様子に気がついた⑫アンナは、アキラが2回目の回転に差ししかかろうとする時に、素早くしゃがみこんで、中腰の体勢から、「wa」と叫ぶと同時に、右手を上げて飛びあがり、その場にしゃがむ [Anna_2-6]。アキラはその間も回転を続ける。⑬アンナはしゃがみこむと、左手で、目の前にあった玩具(プラスチックのボウル)の縁を叩く。ボウルはそれによってアンナ右手付近まで回転を伴って移動してくる。アンナはそのボウルの動きを見るが、右手の手元まで来ると、右手をあげて、座ったまま勢いよく伸び上がる。一度体勢を戻すが、間髪いれず、もう一度今度は両手をあげて「shu」という声と共に伸び上がる。その際、左手がボウルに当たって、ボウルは離れていく [Anna_2-6]。アンナはそのまま膝立ちでいる。

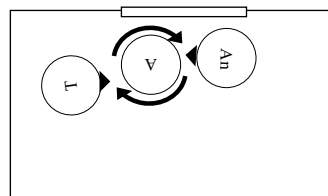


図 9

その頃アキラは、4回目の回転にさしかかっていたが、そこでバランスを崩して保育者に寄りかかって、回転を止める。アキラはよろめきながら、窓の外を指さして、窓際まで近づく [Akira_2-7]。アンナも立ち上がり、窓の外を指さす。保育士も窓の外を覗き込み、「いないねえ」と声をかける。図10

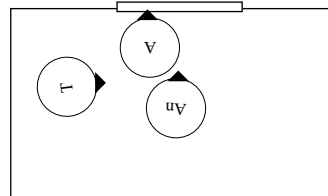


図 10

⑭アンナは鳥の羽のように両手を広げて、「wa」「sa」という声と共に素早く2回上下させて、そのまましゃがみ込む。それに気がついた保育者は、アンナに「パタパタパタパタ…」と両手を羽ばたかせる仕草をして言葉をかける [Anna_2-7]。するとそれまで窓の外をずっと見ていた⑮アキラは、振り返り、再び、グルグルと回転を始め、2回、回る [Akira_2-9]。⑯その開始とほぼ同時にアンナはもう一度大きく伸び上がりしゃがむと、座ったまま手を

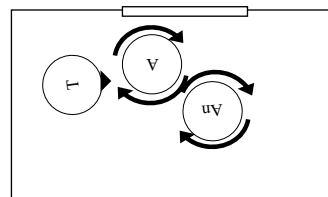


図 11

広げて左右に体を回す。図11そして、アンナも立ち上がり、グルグルと回る [Anna_2-7]。

アキラは2回半回ったところで、保育者に寄りかかり、その場を去って次の遊びへと移る。アンナは再び、窓の外を見る。

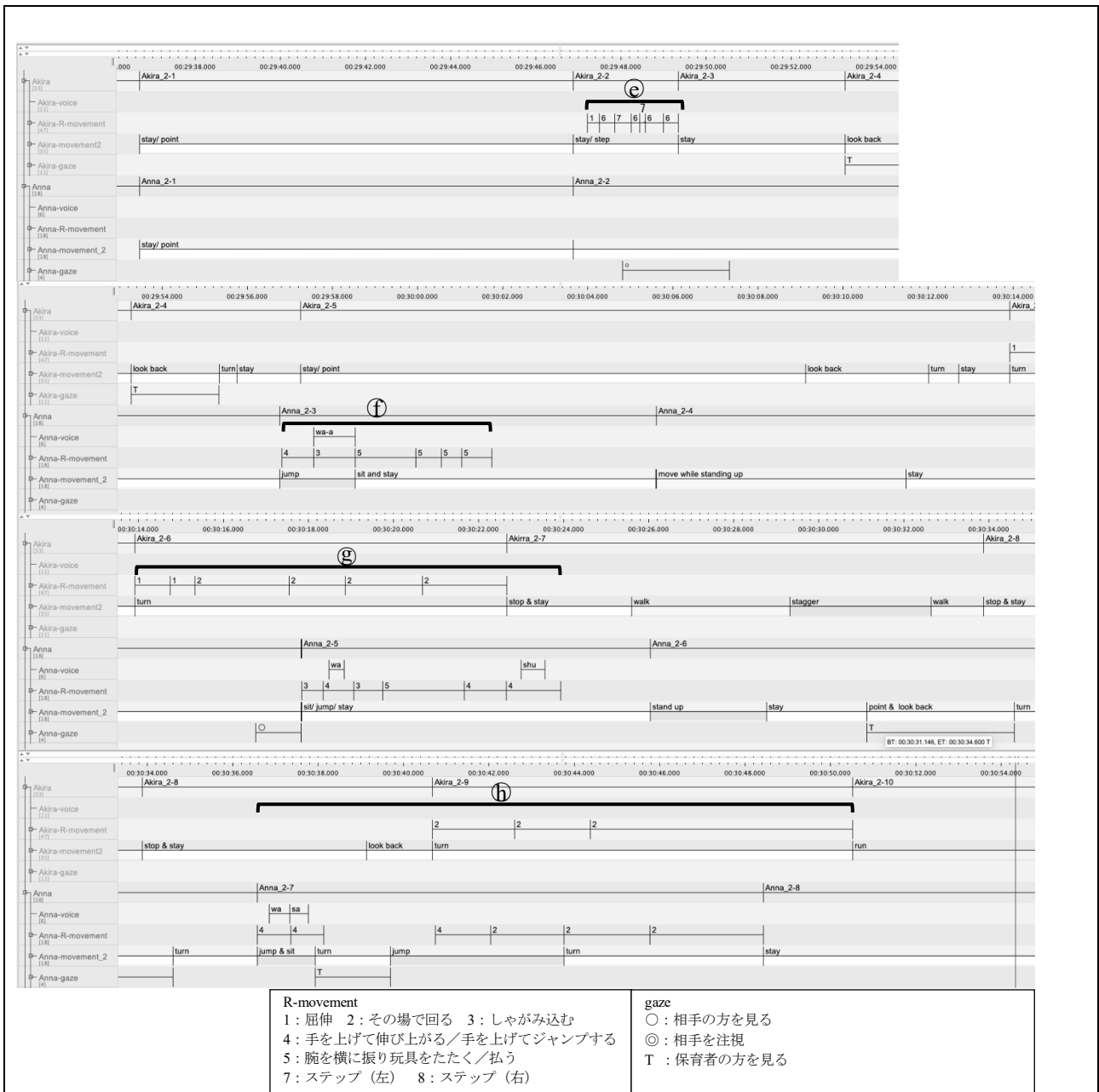


図12 事例2 ELAN 分析結果

事例2では、スズメへの関心の共有が起点となる。窓の外の室外機やスロープの上にスズメが飛んで来て止まることが時折あり、園児たちは、それをとても楽しみにしている。視覚や聴覚によってスズメを見つけると、指さしをして窓に近づき、視線や声によって保育者や仲間知らせることが、この時期によく観察された。事例2では、アンナとアキラが、同時にスズメに気がついて、指さしをしたことから、関わりが始まる。

アキラは、スズメが来たことの喜びを、左右の素早いステップでリズムカルなダンスのような動きをすることで表したと考えられる(下線⑧, 図12◎)。その動きへのアンナの着目(下線⑨)は、次のアンナの動き(下線⑩, 図12Ⓧ)の発現の誘因の1つになったと考えられる。そして、その、手を上げて飛び上がり、瞬時にしゃがみ、玩具を勢いよく転がすという連続する一連のリズムカルな動きは、次のアキラの動

きへの参入においても用いられることとなる。アキラは再び気持ちの高まりを、全身を使って表現するが、今度は上下の動きで弾みをつけた後、その場でグルグル回る動きを行う（下線⑫）。それを見たアンナは、先ほどと同様の表現方法でアキラの動きに参加しようとする（下線⑬）。さらに続いて2回伸び上がり、より大きな動きで表現する（下線⑭）。⑮では、アンナはアキラの動きの中に合わせて入り込むことで、スズメへの関心や喜びを共感しようとしたと捉えられる。アキラと共にスズメを見たいという気持ちは、ハルトとアキラの間に必死に割り込み、アキラの右隣を譲らなかつた姿からも捉えることができる（下線⑯）。だが、アキラはアンナの動きをはっきりと意識した様子は見られない。

そして、再び2人で窓の外を眺めた後に、⑯の動きの関わりが行われる。⑰・⑱では、アキラの動きを契機としてアンナが動きで関わろうとしていたが、ここではアンナが先に動きで表現する（下線⑮）。それは、アキラと動きの中で共に共感したいというアンナの気持ちの表れとも取れる。アキラは振り返って笑顔で楽しそうに、回転を始める（下線⑯）と、アンナは座ったまま回転のような動きをした後、すぐに立ち上がり、アキラと同調するようにアンナもグルグルとその場で回る（下線⑰）。

⑲では、アンナはアキラと同じ動きをするなど、動きの中で関わろうとしていることは、はっきりと見て取れる。だが、アキラはアンナの動きに同調するあるいは応えようとするようなことは感じ取られず、回ること自体への楽しみの強さを感じていると推察される。

3-3 連続する手振りへの強い関心

事例3（11月9日）[アキラ（A）：1歳5か月、ナオミ（N）：11か月]

ナオミは10cmほどの高さのマットのそばに座り、両手を上下に素早く振り始める（15回）。その後、拍手するような動きで、腕を開いたり閉じたりすることを繰り返す。図13アキラは、棚からシャベルの玩具を取り、その場で立ったまましばらくナオミの方を見ている。ナオミが3回目の拍手の動作をするのを見て、ナオミの方へ歩き出す。

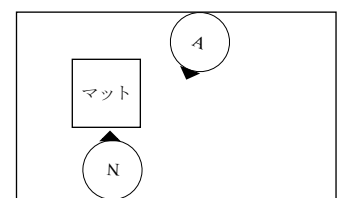


図 13

図14そしてナオミに近づくと、しゃがみ込み、ナオミの方に顔を向けて、じっとナオミを見ている [Akira_3-2]。アキラは一度だけを顔を右に向けるが、すぐにナオミの方を向き、アキラの右手の先のマットの下にあるチェーンの玩具を取る時も顔はナオミの方に向けたままである [Akira_3-3]。この間、ナオミの拍手のような動作は止むことなくリズムカルに繰り返される。⑳アキラは、ナオミの動きに合わせて、手に持っていたシャベルの玩具を少し上に上げ、マットの上に振り下ろして、マットをたたいて音を鳴らす。次のナオミのストロークに合わせて、また、たたく。

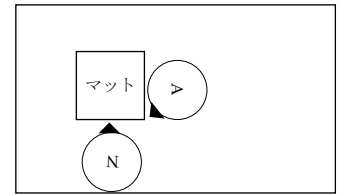


図 14

するとナオミは動作をやめ、ハイハイでその場を去る。

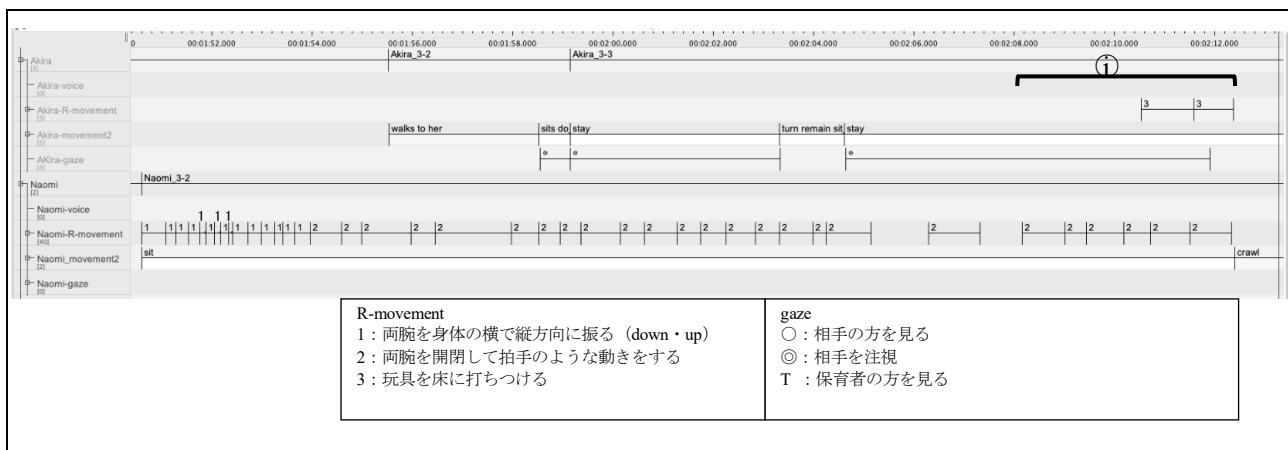


図 15 事例3 ELAN 分析結果（一部）

事例3は、ナオミのリズミカルな動きへのアキラの強い関心を契機として生じた関わりである。アキラは、ナオミの止むことなく繰り返されるリズミカルな手振りに内在する意味を理解しようとして、ナオミの動きに着目し続けたと見取られる。そして、ナオミの連続する動きの中に、自分の動き合わせることで、理解・共有しようとする（下線㉔、図15㉔）。しかし、アキラのその行動はナオミの期待とは一致せず、ナオミは去ってしまう。

アキラには、ナオミのリズミカルな動きの中に同調することで、音楽性を持ってナラティブを共に創ろうという意図が見られるも、ナオミの行為の意図の理解には結び付かず、一方的な関わりとなったと考えられよう。

4 考察

4-1 ミュージカリティの発現

事例1の㉔・㉔でアキラは、ハルトのリズミカルな動きをよく見た後に、リズミカルな表現を行うことで応えることが行われた。㉔では、ハルトと同じ動きで、㉔では、自分なりの動きの表現で応えた。そして㉔では、自分が表現している時に、ハルトが動き始めると、動きを調整してハルトの動きに合わせるような行為も見られた。それらには明らかにミュージカリティの発現があると言ってよいだろう。アキラはハルトのリズミカルな動きを見ることで、相手の動きのミュージカリティを感受し、ミュージカリティを発動して動きを調整しながら応えていたのである。また、アキラとハルトによる㉔のやりとりは、互いに共調整しながら、ミュージカリティによってナラティブを共創造している姿であると考えることができよう。

事例2では、それぞれに自分なりの動きの表現でスズメを見た喜びを表しており、そこには生得的な音楽性が感じられる。アンナの意図がアキラに伝わることはなかったものの、アキラの動きの中のミュージカリティを感じて、ミュージカリティを駆使した動きで応えたり、はたらきかけたりする姿がそこには見て取れる。

事例3でも、アキラによる動きの調整が見られる。ナオミのリズミカルに絶え間なく続く動きの中に、同調するように、タイミングを図り、動きで参入しようとする姿が捉えられた。

Mazokopaki & Kugiumutzakis (2009) は、乳児1人の状況で音楽を聴かせた時に、「共感的あるいは『共リズム』に体を動かすことで、音楽に引き付けられ、音楽を欲し、音楽に反応し、音楽を賞賛する」能力があることを実験により明らかにした（邦訳 p.191）。歌の最初の部分では傾聴し、驚きや興味を示し、音源の探索と定位をした後に、ダンスや歌で参加し、嬉しさを表現し、喜びを深める姿から、リズムと情動を共有したことを説明している（邦訳 p.193）。これと同様の事象は、本研究で取り上げた3つ事例の中でも生じており、相手の動きのリズミカルな動きの中に、その音楽性や情動を共有しようとしていたと考えることができるだろう。そして、ナラティブを共創造しようとはたらきかける試みが行われていたと言える。

4-2 双方向の関わり成立

3つの事例の中で、最終的に2人の子ども間で関わり合いへとつながったのは、事例1のみであった。事例2、及び事例3においても、相手の動きを見ることから始まり、そこに内在する意図や情動を理解しようとする試みが行われ、それを共有するために、動きを調整して同期あるいは同調しようとするが、ナラティブを共に創ることとはならなかった。

この要因として2つが考えられる。まず1点目は、相手の行動の視覚的認知の困難さである。今回抽出した3事例は、一方が相手のリズミカルな動きに気がつき、見ることがそれに応えることの契機となっている。だが、この時、両者は正面で対面していない。声が用いられた場面もあるが、表現の核を成しているわけではなく、その状態で、聴覚刺激のない相手の動きに相手がすぐに気づくことは当然ながら困難であったと考えられる。高橋・佐藤（1985）は、社会的交渉が成立するための条件として、まず、「そこに存在する2者のうちのどちらか一方が他方に対して、相手の注意を喚起し、それに応じさせやすいようなやり方で働きかけなければならない」（p.25）と示している。相手の動きの中のミュージカリティを感じ、ミュージカリティをもって応えることで、「応じさせやすいようなやり方で働きかける」ことは行おうとして

いるものの、そもそも「相手の注意の喚起」が上手くなされなかったために、やりとりの成立に至らなかったと言えるだろう。

事例1の下線⑦では、アキラの視線に、ハルトが気がつくまで、アキラが待ったことにより、一瞬の間ではあるが互いに注視し合う状況を作り出し、感情を共有することに結びついた。「相手に気がついてもらうことで初めて相手とつながることができる」こと、すなわち相手の注意を喚起する必要性に気がついたのには、ハルトのリズミカルな動きに何度も一方的に応えることを繰り返すことを通して、ミュージカルリティを基盤とする動きの中でハルトとつながりたいというアキラの強い気持ちがあったと推察される。

そして、要因の2点目は、動きに内在する意図の理解の困難さである。コミュニケーション・ミュージカルリティに関する研究は、声を伴う大人と子ども子どもやりとりに関するものが中心である。Powers & Trevarthen (2009) は「人間の声は意思疎通できることに関して並外れて豊かである」(邦訳 p.203)と述べているが、声を伴わない、今回のようなリズミカルな動きの中に内在する意図や情動を汲み取ることは、子ども同士の関係においては困難であったと考えられる。このことは、事例3の事例に顕著に表れた。アキラが、ナオミの継起するリズミカルな動きをじっと観察し、ようやくその中に入り込んだものの、その瞬間にナオミはアキラの元を急ぎ足で去ってしまった。ここには、ナオミの行為の意図とアキラの理解に乖離があったと考えられる。

ここで、動きに内在する意図や情動の理解を助ける役割を果たすのが、同じ「物」や共通の「事」であると考えられる。事例1ではアキラとハルトは同じ輪の玩具をそれぞれに持ち、それを用いて、それぞれリズミカルな動きを行っていた。齊藤(2012)は、1~2歳児の子ども同士の関わりについて、「仲間と同じ物をもつ、同じ場を共有すること自体が、仲間とのかかわりを結びつけている可能性も示唆される」(p.16)と述べている。最終的に、双方向の関わり合いが生じたのは、ハルトがアキラに気がついた時、瞬時に同じ物を持っていることに気がつき、つながりを感じたという効果も大きいといえるだろう。そして、アキラの動きに内在する意図の理解については、同じ物であるからこそ、先の行動の予測が容易であったとも考えられる。

事例2ではスズメへの関心という「事」を共有し、アキラ、アンナともに、スズメの登場への喜びをリズミカルな動きでそれぞれ表現している。だが、2人が関わり合うことへとつながらなかった要因の1つとして、アキラの興味の移り変わりがあると考えられる。アキラの興味は、その動きの中で行った「回ること」へと移ったと考えられる。そのことに、アンナは気がつかず、アンナは、アキラとリズミカルな動きの中でナラティヴを共に創ることを試み続け、2人の意図は乖離していったと考えられる。

リズミカルな動きを伴って、コミュニケーション・ミュージカルリティを基盤とした双方向の関わりが成立するためには、相手の注意を喚起することがその前提条件として重要であるが、それに気がつくことは、この時期の子どもには困難である可能性がある。また、共通の事物の介在が、リズミカルな動きに内在する意味の理解を助ける効果をもつことが示唆される。

5 おわりに

本研究では、コミュニケーション・ミュージカルリティを理論的枠組みとし、2歳未満の子どものリズミカルな動きを伴う関わりについて3つの事例を抽出し、分析・考察を行った。子どもは、リズミカルな動きで自己表現しようとするだけでなく、他者の身振りや動きに内在する意味や情動を間主観的に理解しようとし、相手のリズムに合わせるように自身の動きを調整しながら、応えようとする姿を捉えられたことは、本研究の成果であると言えよう。

本研究で取り上げた事例は3事例であったが、より多くの事例の検討を行い、知見を蓄積していくことにより、動きを伴う子ども同士の相互作用の成立の過程についてさらに深めることを今後の課題とする。

謝辞

本調査にご協力いただきました保育園の先生方、及び園児の皆様にご心より感謝申し上げます。

付記

本論文は、the PECERA-HK Celebration of 25th Anniversary of HKSAR Establishment cum 22nd PECERA Annual Conference でのポスター発表に、加筆・修正したものである。

注

- 1) 令和4年4月現在で56.0% (厚生労働省2022, p.4)。
- 2) ELAN (Version 6.4-M1) [Computer software]. (2022). Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics. (<https://archive.mpi.nl/tla/elan> よりダウンロード)

引用・参考文献

- Malloch, S. (1999). Mothers and infants and communicative musicality. *Musica Scientia*, Special Issue (1999-2000), 29-57.
- Malloch, S., & Trevarthen, C. (Eds.) (2009). *Communicative musicality: Exploring the basis of human companionship*. Oxford University Press. (邦訳 根ヶ山光一・今川恭子・蒲谷慎介・志村洋子・羽石英里・丸山慎 (監訳) (2018) 『絆の音楽性 つながりの基盤を求めて』音楽之友社)
- Mazokopaki, K., & Kugiumutzakis G. (2009). Infant rhythms: Expressions of musical companionship. In S. Malloch & C. Trevarthen (Eds.), *Communicative musicality: Exploring the basis of human companionship* (pp.185-208). Oxford University Press. (邦訳 根ヶ山光一・今川恭子・蒲谷慎介・志村洋子・羽石英里・丸山慎 (監訳) 『絆の音楽性 つながりの基盤を求めて』音楽之友社, pp.178-199.)
- Powers, N., & Trevarthen, C. (2009). Voices of shared emotion and meaning: Young infants and their mothers in Scotland and Japan. In S. Malloch & C. Trevarthen (Eds.), *Communicative musicality: Exploring the basis of human companionship* (pp.209-240). Oxford University Press. (邦訳 根ヶ山光一・今川恭子・蒲谷慎介・志村洋子・羽石英里・丸山慎 (監訳) 『絆の音楽性 つながりの基盤を求めて』音楽之友社, pp.200-230.)
- Trevarthen, C. (1999). Musicality and the intrinsic motive pulse: Evidence from human psychobiology and infant communication. *Musica Scientia*, Special Issue (1999-2000), 155-215.
- 遠藤純代 (1995) 「遊びと仲間関係」麻生武・内田伸子 (編) 『講座 生涯発達心理学 第2巻 人生への旅立ち—胎児・乳児・幼児前期』金子書房, pp.229-263.
- 厚生労働省 (編) (2018) 『保育所保育指針解説』フレーベル館.
- 厚生労働省 (2022) 「保育所等関連状況取りまとめ (令和4年4月1日)」, インターネット, <https://www.mhlw.go.jp/content/11922000/000979606.pdf> (2022/12/10 アクセス) .
- 小山朝子 (2004) 「乳幼児期におけるコミュニケーションとしての音楽表現—未満児の事例を通しての考察—」『保育学研究』第42巻第2号, pp.25-34.
- 齊藤多江子 (2012) 「1~2歳児の仲間と物とのかかわり—「仲間と同じ物に関心をもつ」行為に着目して」『保育学研究』第50巻第2号, pp.96-107.
- 高橋道子・佐藤桂子 (1985) 「乳児の社会的相互交渉におけるものの役割」『東京学芸大学紀要1部門』第36巻, pp.19-29.
- トレヴァーセン, C. (2011) 「音楽アイデンティティの起源: 音楽的な社会性は乳児期から存在する」レイモンド・マクドナルド, デイヴィッド・ハーグリーブス, ドロシー・ミエル (編著) 岡本美代子・東村知子 (訳) 『音楽的アイデンティティ—音楽心理学の新しいアプローチ』北大路書房, pp.29-51.
- やまだようこ (2020) 『ことばの前のことば うたうコミュニケーション』新曜社.